ラフ・ナー族の住まいにおける人びとの空間認識と 行動から見いだされる空間概念

中国雲南省思茅地区孟連ダイ族ラフ族ワ族自治県のバーン・カの場合

A STUDY ON THE SPATIAL CONCEPT OF LAFU-NA PEOPLE AS DEFINED BY THEIR WAY OF SPATIAL RECOGNITION AND BEHAVIOR IN THEIR DWELLING LIFE

The case of Ban-ka Village in the Menglian Dai nationality Lafu nationality

Va nationality Autonomous Prefecture, Yunnan Province, China

谷内 麻里子*1, 塩谷 壽翁*2, 富樫 穎*3

Mariko TANIUCHI, Toshio SHIOTANI and Satoshi TOGASHI

This study has been carried out to investigate the spatial order, which forms the basis of dwellings of Lafu Na people in Yunnan, China.

In this paper, we understand how the housing aspect of dwellings of Lafu Na people is to evolve by partly surmising. In addition, we will understand the method of recognizing space and the method of behaviors of the people in special occasions as well as in everyday matters and find out the concept of the method of their recognizing space. By so doing, we will explain the order which creates structure of space of dwellings, and pursue how such an order is to change.

The spatial order which creates dwellings can be explained by the spatial concept included in their way of behavior and the way of recognizing space. It is possible to find space concepts where dual things are opposed to each other such as higher rank and lower rank, internal part and external part, and being closed and open from the names of the recognized area, recognized vocabulary and the method of behavior, which represent recognition of the dwelling aspects by the people.

In this study, we have continued to search the non-daily life such as their ritual in marriage and funeral. The spatial order is well observed in non-daily life and has generated the dwelling style which has long been inherited. The constitution of dwellings and its change can be illustrated by people's behaviors in ritual.

In conclusion, we consider the dwellings of Lafu Na people has been constructed taking principally non-daily life into consideration.

Keywords : minority people, dwelling culture, behavioral patterns, sense of space, symbolism of dwellings

少数民族, 住文化, 行動のしかた, 空間感覚, 住まいのシンボリズム

1. 研究の目的・意義と本稿の内容・方法 (図1)

本研究は、ラフ・ナー族¹⁾の住まいをつくりだしている空間的な秩序、すなわち住まいの空間的な構成をつくりだす枠組みを事例的に追究しようとするものである。

これまでに中国雲南省のシップソンパンナー (西双版纳) および思茅地区の高床系の住まいに居住する少数民族を対象にするフィールドワーク²⁾をおこない、住まいおよび住生活の継承と変化の追究をつづけている。本稿はその一環をなすものである。

筆者らは、2001年8月から9月にかけて、中国雲南省思茅地区孟連ダイ族ラフ族ワ族自治県公信郷バーン・カー社のラフ・ナー族の住まい (以下、バーン・カ対象住居) を調査している (以下、バーン・カ調査)³⁾。また2002年8月から9月にかけて、同県公信郷バーン・ピエ二社のラフ・ナー族の住まい (以下、バーン・ピエ対象住居) を調査している (以下、バーン・ピエ調査)⁴⁾。

本稿では、バーン・カの住まい (バーン・カー社全60戸のうち17戸を調査。以下、バーン・カ調査住居) に現れる傾向を事例的に述べる。ま

たバーン・ピエの住まい (バーン・ピエ二社全44戸と一社の一部3戸を併せた47戸のうち14戸を調査。以下、バーン・ピエ調査住居) に現れる傾向を、住まいの空間的な構成に限って参照する。

本稿では、人びとの住まいにおける行動 (行為、身体動作、行為の行われる場をあわせる概念)⁵⁾ および空間に対する認識に含まれる空間概念を読みとることによって、住まいをつくりだしている空間的な秩序を説明しようとする。人びとの住まいにおける行動および空間に対する認識は、住まいに一つの空間的な秩序をつくりあげる作用をもつ。この方法が高床系の住まいの居住面⁶⁾における空間概念の説明に有効なことは、前稿⁷⁾で事例的に確かめている。

本稿でとる方法は次のようである。

(i) 住まいの内部と外部の居住面をどのように認識しているのかを、人びとが認識している空間的な広がり (以下、認識領域) をあらわす呼び名から読みとる。そのうえで認識領域の呼び名に含まれる空間概念をとらえる。また、空間の認識をあらわす言葉 (以下、認識語彙) の存在を確かめて、語彙に含まれる空間概念をとらえる。

*1 大阪市立大学大学院生活科学研究科 博士後期課程・工修

*2 大阪工業大学工学部建築学科 教授・学博

*3 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授・工博

Graduate Student, School of Human Life Science, Osaka City Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Osaka Institute of Technology,
Ph. D.

Prof., Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Dr. Eng.

図1 調査を行った集落：バーン・カとバーン・ピエ

(ii) 日常生活および非日常生活における人びとの行動のしかたに含まれる空間概念を読みとる。具体的には、居住面でおこなわれる人びとの行動の場を確かめて、男と女、世代の間、同居する家族⁹⁾と外来者の間の相対的な位置関係に、どのような空間概念が存在するのかをさぐる。

(iii) タブー（ムラ人が大自然の霊とする集落の守護霊）⁹⁾の存在を中心にすえて、精霊信仰に関係する人びとの行動と空間認識から見いだされる空間概念をとらえる。

以上に述べる研究・分析の方法は、多くの先行する研究の延長上にある。本稿は、象徴人類学的手法としての二元論的分類の方法

シェカイエの例 (L16)

ウガカイエの例 (L4)

オカイエの例 (L2)

L n : 調査住居番号

図2 バーン・カの住まいの実例（高床の上階をしめす）

（象徴的二元論）を援用して、住まいの内部における空間的秩序を追究するものである¹⁰⁾。さらに居住文化は、先行する研究¹¹⁾では、実在の世界の上に世界観が規定する生活と空間の対応を考慮にいれて概念構造を理解しなければならないとされるが、本稿の考察は、精霊タブーが祀られるプーイエの位置を認識する空間概念を述べて、住まいの空間構成に関する象徴性を説明するものであり、その大部分は、住まいをつくりだす空間概念を生活の表面に現れる現象から読みとるに留まっている。

本稿で非日常生活（婚姻の儀礼、葬送の儀礼などの通過儀礼、年中行事）における人びとの行動をとりあげるのは、これまでに継承されてきた住まいをつくりだしている空間的な秩序は、儀礼などの非日常生活における人びとの行動に記憶されている、と考えるからである。このような儀礼を解釈するアプローチは、文化人類学の分野で展開されている¹²⁾。それらの既研究には、しかし、儀礼をおこなう空間の意味の考察が不足している、と筆者らは考えている。また、ラフ・ナー族の儀礼については詳細な報告があり¹³⁾、貴重なものであるが、住まいにおける儀礼での人びとの行動の説明には及んでいない。

本稿は、調査をおこなう上での制約から、少数事例の比較分析に留まるものであるが、これまでにおこなってきた一連の研究¹⁴⁾と併せて、高床系の住まいに居住する少数民族の住まいの空間的な秩序を説明する研究に端緒を開く意義をもつのではないかと筆者らは考えている。

2 居住面の構成とその展開（図2、図3）

ラフ・ナー族は高床式の住まいに住む。人びとが生活するおもな居住面は、高床の上階オカロ（家の上つまり上階の意、オは住まいの全体、住まいの内部あるいは居住面の全体をあらわす言葉、カロは中間の意）である。

バーン・カおよびバーン・ピエのラフ・ナー族にこれまでに継承されてきた住まいは、複数のムラ人からの聞き取り¹⁵⁾を参照して確かめることができる。それは、高床の上階オカロが、カツ（囲炉裏）のある「おおきな部屋」、オパテビ、グー（階段）をあがったところにある半外部空間としてのグナバ、ゴチャ（露台）から構成されるものである¹⁶⁾。ゴチャは、穀物の乾燥の場であり、物干し場でもある。オホ（家の下つまり地上階の意、ホは下の意）は、農作業の場になったり穀物庫が置かれたりすることではなく、ほとんどといっていいほどに使われていない。

高床の上階オカロの内部は、「おおきな部屋」とその奥のオパテビに分節されている。この内部空間の分節に至る展開がどのようにおこなわれたのか、いつ頃から進んだのかは不明である。

バーン・カ調査住居およびバーン・ピエ調査住居の共時的な比較によれば、継承されてきた居住面の構成は、ほとんど変化せずに保たれているもの、と推測できる。

バーン・カとバーン・ピエの住まいには、ウガカイエと呼ばれる比較的規模の大きな住まい（桁行き方向に5列の柱の列がならぶ住まい、ウガは5、カは列、イエは住まいの意）が多い。また少数のシェカイエと呼ばれる比較的規模の小さな住まい（桁行き方向に3列の柱の列がならぶ住まい、シェは3の意）が並存している。いっぽう他民族との文化的な融合が認められる住まいも、近年には現れている。これらの

これよりオパテビと「おおきな部屋」との間には、聖チジャーなる場と俗マチャーなる場、隔離される場と開放される場という対立す

図4 住まいにおける空間認識から見いだされる空間概念 (バーン・カの場合)

る空間概念が複合して存在していることがわかる。

(iv) すでに述べているように、「おおきな部屋」には囲炉裏カツをランドマークとする空間認識のしかたが認められる。また後述する日常生活および非日常生活における人びとの行動からは、カツは住まいの中心として認識されている、ことが説明できる。

集落の中心にある広場カコジは、人びとにとって聖チジャーなる場である（これは例えば、カコジでは若い男女が恋を語らうことは禁忌とされていることなどから説明できる）。聖チジャーなる場カコジを囲むように住まいの屋敷地は配列されている。これより聖チジャーなる場カコジを中心にして俗マチャーなる日常の生活の場が広がっているとの解釈は可能であり、集落の中心を聖チジャーなる場、周縁を俗マチャーなる場とする空間概念を読みとることができる。

以上より、住まいでは囲炉裏カツが中心となり集落では広場カコジが中心になる、中心と周縁とを分けてとらえる空間概念が相似して存在する、と考えることはできる。

(v) 住まいの内部はイエコオ（イエは家、コオは内の意）、外部はイエバア（バアは外の意）と呼ばれる。住まいはオバ（壁）を境界にして内部と外部とに分けて認識されている。また屋敷地の内外を仕切る塀はなく、一部に竹の簡単な垣根がある程度なのだが、屋敷地の内部はズクー、外部はズクーオバアと呼ばれていて、屋敷地の内部と外部とは明確に分けて認識されている。いっぽう集落の内部はカコオ（ムラの内意）、外部はカジャー（ムラの外意）と呼ばれていて、集落は内部と外部とに分けて認識されている。以上より、住まい、屋敷地、集落のそれぞれの段階ごとに、内部と外部とを分ける空間概念が存在していることがわかる。

図5 集落における空間認識から見いだされる空間概念 (バーン・カの場合)

(vi) 高床の上階では、ベボオ（桁）から上部の小屋裏はオナ（ナは上の意）、ベボオと床面との間はオカロ（カロは中間の意）と呼ばれる。また地上階はオホ（ホは下の意）と呼ばれる。住まいはオナ、オカロ、オホの三つの部分に分けて認識されている。

オナは聖チジャーなる場、オカロとオホは俗マチャーなる場と認識されている。日常にオナにあがったりオナに触ったりすることは禁止されている。オナに触ると悪いことが起こるといふ言い伝えがあるという。オナには年に一度、正月前にイエス（イエは家、スは掃除するの意）の時にだけあがる。いっぽう高床の上階より上のオナとオカロは「浄」なる場、地上階オホは「不浄」なる場と認識されている。高床の上階の床面を境にして、住まいを「浄」なる場と「不浄」なる場に分ける空間概念が存在する。

(vii) ウガカイエの「おおきな部屋」には、シェカイエでは認められなかった認識領域が生じている。それはオホバのイカタ（炊事調理のための「もの」および水を置く場）とケブク（食器を置く場）である。またシェカイエのオナバのカツのそばにあったズクー（寝場所）は、ひとつの領域シェトエ（シェトは寝る、エは台の意）として認識されるようになる。ウガカイエではシェカイエの認識領域をもとにして、それぞれの場の意味が明確化されるような空間認識のしかたが現れている。

4 行動からみいだされる空間概念 (表)

4-1 日常生活における行動のしかたと空間概念

ラフ・ナー族の日常生活では、同居する家族がおこなうウチ向きの生活と家族のほかの外来者が加わっておこなわれるソト向きの生活とで、あきらかに人びとの行動のしかたに違いが認められる。そこには前述する空間認識のしかたから読みとれる空間概念が、以下のように観察できる現象として現れている。

(i) 炊事調理の過程のほとんどの行為は、高床の上階の内部空間でおこなわれる。一部の住まいではゴチャが使われる。グナバ、地上階がつかわれることはほとんどない。炊事調理の場は「おおきな部屋」の下位の側オホバである。上位の側オナバは使われない。

火を扱う炊事調理の過程の行為、料理を盛りつける、配膳などの行為の場は、囲炉裏カツおよびカツに隣接する下手のオテチャク

表 日常生活における行動の場 (バーン・カ調査住居のうち人びとの行動を詳細に調査できたものをしめす)

調査住居	住まいの型	1) ソダの有無	2) 家族の人数	高床の上階オカロ												水場		
				オナバ			ナホバ	シェトエ	ヤミコ	オホバ			オバテビ				グナバ	ゴチャ
				手前	カツの下手	奥				手前 (イカタ)	カツの上手	奥 (ケブク)	オバテビ オナバ	中央	オバテビ オホバ			
L1	ウガカイエ	有	3		●	▲	△51 m51	○53, △23 f53		食 K2K3	食 K1K5	食 K6						K4
L2	オカイエ	無	3		m29 ●▲						食 f25 K1K3	K5K6						
L3	ウガカイエ	有	4		●		m35 f34 ▲	△35-○34		K2	食m11m10 K1K3K6			△11△10				K3K4
L4	ウガカイエ	有	4		●		△35	○35		K4	食 K1K2▲	K6		○14○8				K4
L5	ウガカイエ	有	3		●		▲	△30-○30 ○13		K4	食 K1K5K6							K3K5
L6	ウガカイエ	有	5	m33m26	m70 ●	▲	f60	△70-○60		K2K3	食 K1K5K6			△33-○26 ○3				K2K3K4
L7	ウガカイエ	有	2		●	m50	食 ▲	○46	K5	K2	食 f46 K1K3K6			△50				K4
L8	ウガカイエ	有	4		m28 ●		○27 △4 ▲	△28	f27 食	K3K4	食 K1K2K5K6			△11				
L9	ウガカイエ	有	4		m40 ●		f40 ▲	△40-○40 ○11		K3	食 K1K2K5K6			○16				K4
L10	オカイエ	無	4		f30 ●		m32m12 ▲	○60 △12 △32-○30	f60		食 K1K3K5K6							K2K4
L17	ウガカイエ	有	3		●		m60 食 ▲▲	△60-○40		K2K3K4	食 f40 f16 K1K5K6			○16				K2K4

△n・○n:同居する家族の就寝の場 (△は男、○は女、添字nは調査時の満年齢、△n-○nは夫婦) (調査住居L2の就寝の場は不定)

食:食事の場

炊事調理の場 K1:加熱・もりつけ・配膳 K2:食器・調理具(鍋・釜など)を洗う K3:米を研ぐ K4:野菜を洗う K5:野菜を切り刻む K6:魚・肉を切りさばく
mn、fn:休息およびくつろぎの場(場が定まっている10歳以上の者のみをあらわす、mは男、fは女、添字nは調査時の満年齢)

(調査住居L1の△23、調査住居L4と調査住居L5の家族全員、調査住居L8の△11、調査住居L9の○16と○11の休息およびくつろぎの場は不定)

外来者を応対する場(老人の男の客の場合のみしめす) ●:外来の老人(男) ▲:応対する家族のうち最も年配の男

1) シェカイエ:桁行き方向に3列の柱が並ぶ住まい、ウガカイエ:同5列の柱が並ぶ住まい、オカイエ:同4列の柱が並ぶ住まい、
2) ソダ:オカロ(住まいの上階)の「おおきな部屋」とオバテビに對する男女を象徴する二本の機持ち柱

(オは飯、テはつくる、チャは食べる、クは場の意)である。カツでは人の食べ物と豚など家畜の餌ワオチャ(ワは豚の意)を煮る。米を研ぐ、野菜を洗うなどの下ごしらえの行為、食器・調理具を洗う後処理の行為など、水を扱う炊事調理の過程の行為はイカタ(イカは水、タは置き場の意)です。また野菜を切り刻む、肉を切りさばくなどの食材を加工する行為の場はオテチャクとイカタの間である。

チャ(食事、主食を食べること)は日に三回である。朝飯ムソナオと夕飯ンブオの場は、「おおきな部屋」の下位の側、つまりカツのオホバ寄りの場およびカツとケブク(あるいはケテク、食器置き場、ケは皿などの食器の意)との間である。

食事および炊事調理の行動はすべて「おおきな部屋」の下位の側でおこなわれる。ここには「おおきな部屋」で上位の側と下位の側とを分ける空間概念が現れている。

(ii) 休息およびくつろぎの行動は、オナバ、オホバ、ナホバなどの囲炉裏カツの周辺の間を分けておこなわれる。概括的には、上位の場オナバや奥まったナホバに位置するのは家族の生計の中心となる男である。同じ場に居あわせるほかの家族は、それよりも下位の場に位置する。休息およびくつろぎの場は老若でも使い分けられる。老人は囲炉裏の近くに坐り、若者は囲炉裏から遠い位置に坐る。

(iii) 継承されてきた就寝のしかたは、カツの周辺に敷物を敷いて眠るものである。とくにカツの上位の側オナバの就寝の場はズクーと呼ばれる。このような就寝の形態は、現在でもシェカイエに残っている。その後にズクーは囲炉裏のある床面より一段あげてつくられ、シェトエ(前出)と呼ばれるようになる。現在でもこの部分をズクーと呼ぶ例も認められる。

聞き取りによると、受け継がれてきた就寝のしかたは、カツの上位の側オナバのズクーで世代が上の夫婦が眠り、ナホバに若い世代が眠るものであった。またオバテビオホバは結婚して子供ができるまでの若夫婦の就寝の場であった。

調査時の就寝の形態は、概括的にみればシェトエで同居する家族のうち年齢の高い夫婦あるいは生計の中心になる夫婦が眠り、オバテビオホバで若い世代の夫婦あるいは子供が眠るものである。世代の間で就寝の場を「おおきな部屋」とオバテビで分けるように、就寝の形態は変わってきている。

(iv) 外来者を応対するソト向きの生活における人びとの行動のしかたからは、オナバとオホバとの間に上位の場と下位の場、ヤミコとナホバとの間に手前の側と奥側などの二元的に對立する空間概念を確かめることができる。

外来者の応対は「おおきな部屋」の囲炉裏カツの周辺でおこなわれる。外来者が男の場合と女の場合とでは、応対する側と應對される側との間の位置関係は違っている。

外来者が男の場合は、應對する側も應對される側も、ともにカツの上位の側オナバに坐る。男の外来者を應對する場面では、客はオナバの手前に、対応する家族はそれよりも奥寄りの場に坐る。女の外来者の場合は、客は出入りに近いヤミコあるいは囲炉裏の下位の側のオテチャクに坐る。この場合、應對する側の男は囲炉裏の上位の側オナバに、女はオテチャクに坐る。ムラの長老とかブーチャ(司祭)など集落での地位が高い外来者を應對する場面では、外来者はカツの上位の側オナバの奥まった位置に坐る。これより人びとは「おおきな部屋」の奥まった場を手前と比べて上位のものと認識していることがわかる。

以上のソト向きの生活での行動のしかたは、調査住居での聞き取りの結果を総合すると、ラフ・ナー族に継承されてきたもの、と考えることができる。このような行動のしかたは、近年に一部の住まいで徐々に変わってきている。それは、應對される老人の男女は共にカツの上位の側オナバに、若者は入口に近いヤミコに坐り、應對する側の男はナホバに、女はカツの下位の側オホバのオテチャクに坐る、ものである。外来者の應對のしかたは、オナバ、ナホバ、

ヤミコ、オホバの間で応対する側と応対される側の場をより明確に分けるように変わってきている。

4-2 非日常生活における行動のしかたと空間概念

バーン・カ調査では、非日常生活（婚姻、葬送、産育の儀礼、年中行事）での人びとの行動のしかたを聞き取っている¹⁸⁾。これはいくぶん形を変えながらも、現在も多くの住まいに継承されている。ここでは紙幅の関係から、婚姻の儀礼、葬送の儀礼における人びとの行動のしかたに現れる空間概念を述べる。

(1) 婚姻の儀礼と空間概念 (図6)

オポーオミフ（婚姻）は、いくつかの段階に分けておこなわれる。それは①女側の住まいでおこなわれる結婚の申し込みノコベ（現在はオミザナイと呼ばれる）、②女側の住まいでおこなわれる結婚式ヘンダテンニー（ヘンダは結婚式、テンニーはその日の意、現在はヘンダと呼ばれる）、③ケーザー（女側の住まいでおこなわれる宴会）、④新婦の住まいで新郎が三日間暮らすシェーニーシェーハーオマター（初夜、シェーニーは三日間、シェーハーは夜、オマターは嫁の意）、⑤親戚の年寄りに新しい水を贈るイカセトー、⑥新婦が新郎の家に嫁入りするオクアムイ（嫁ぐの意）、などである。

これらの婚姻の儀礼での人びとの行動のしかたからは、概括的には、上位下位を強調する空間概念が奥と手前を強調するものになる傾向を読みとることができる。それは以下のように要約できる。

(i) ノコベでは、上位の側オナバとその反対の下位の側オホバを強く認識して人びとは行動していたのだが、現在おこなわれるオミザナイでは、ナホバとヤミコとの間のオコ（奥側）とオバア（手前）の方向を強く認識するように変わってきている。

継承されてきたノコベでは、「おおきな部屋」の入口に近いヤミコに男側の親戚と仲人が坐り、娘とその両親は囲炉裏カツの下位の側オホバに坐る。また村長が立ち会う場合は、村長は上位の側オナバに坐る。現在おこなわれているオミザナイでは、男側の親戚や仲人および村長の位置は変わらないのだが、新婦の両親は「おおきな部屋」の奥まったナホバに坐るように変わっている。

(ii) 結婚の儀式は、女側の住まいの「おおきな部屋」のヤミコでおこなわれる。これは、受け継がれてきたヘンダテンニーでも、現在おこなわれているヘンダでも変わらない。ヤミコが結婚の儀式の場となる理由は明らかではない。

ヘンダテンニーでは、ヤミコの上位の側オナバに花婿花嫁が位置し、下位の側オホバに儀式を司る司祭パーチャが位置する。司祭パーチャは集落の上位の側カウのブーイエの方を向いて祈る。

ヘンダでは、ヤミコの手前の側に花婿花嫁が、司祭パーチャはそれより奥側に坐る。花嫁花婿と司祭とは、奥と手前で対面するように位置する。

ヘンダテンニーの行動のしかたからは、上位の側オナバと下位の側オホバという対立する空間概念を、ヘンダの行動のしかたからは、手前オバアと奥オコという対立する空間概念が読みとれる。

(iii) 結婚の儀式につづく宴会ケーザーでは、新郎新婦はヤミコで両親に挨拶をする。ヤミコは結婚の儀式につづいて儀式の場となる。

オパテビは日常的には外来者は入ることができない空間なのだが、宴会ケーザーでは外来者に開放される。すなわちオカロの内部

空間の全体は宴会の場に転換する。

ケーザーでは長老は「おおきな部屋」のカツの奥まった場ナホバに位置する。ケーザーでナホバはほかの場と分けられるもっとも上位の場と認識される場である。

(iv) 結婚式の翌日には、イカセトー（イカは水、セは新しい、トーは飲むの意）という親戚の老人に新郎新婦が尊敬の意をこめて水を持っていく儀式がおこなわれる。この儀式では、老人はナホバに位置し手前のヤミコの新郎新婦と応対する。ここにも奥オコと手前オバアの方向を強調する空間概念が読みとれる。

(2) 葬送の儀礼と空間概念

葬送の儀礼では、「おおきな部屋」の上位の側オナバと下位の側オホバで分かれる人びとの行動のしかたや場のしつらえが認められる。また集落の中心にある広場カコジとブーイエのある山の側カウを聖チジャーなる場と認識して人びとは行動する。

葬送の儀礼における人びとの行動のしかたおよび空間認識のしかたから読みとれる空間概念は、具体的には次のようである。

ラフ・ナー族の人びとは、死を正常死と非正常死¹⁹⁾とに分ける。葬送の儀礼のおこなわれ方は、正常死と非正常死とは違っている。ここでは正常死の場合について述べる。

(i) 正常死でも若者と老人では葬送の儀礼のおこなわれ方は違う。若者の場合は、遺体は集落の東へ1kmほど離れた山チョツクエ（チョは人、ツは焼く、クエは所の意）で死後ただちに焼かれる。また老人の場合は、遺体を一日の間住まいに置いてから、山チョツクエに運んで焼く。ブーイエのある集落の上位の側カウは聖なる場であり、穢れてはならない場と考えられている。遺体を焼き埋める場は、集落の下位の側カミにあたる東側あるいは北側の斜面である。

これよりカウを穢れてはならない「浄」なる場、カミを穢れた「不浄」なる場とする「浄」なる場―「不浄」なる場という空間概念が読みとれる。

(ii) 死者が老人の場合、遺体は「おおきな部屋」の上位の側オナバの奥まった壁側の位置オナバオに頭を西向きにして安置され、人びとはブーイエの側に向かって拝む。

この「おおきな部屋」での人びとの行動からは、葬送の儀礼では、聖チジャーなるブーイエの側オナバと反対側のオホバとの間には、拝まれる場と拝む場という対立する空間概念が読み取れる。日常的にオナバとオホバとの間に存在する上位―下位の空間概念は、葬送の儀礼では、拝まれる場と拝む場という空間概念に転換する。これより人びとは、日常的にも非日常的にも変わらずに、ブーイエのある方向を認識して行動していることがわかる。

(iii) 遺体を住まいから集落の外部へ運ぶとき広場カコジを通るのは禁忌とされる。人びとは、遺体はマター（穢れの意）なもの、聖チジャーなるカコジに遺体を入れると穢れる、と考えている。

(iv) 死者は霊オハクエとなって、関門節と開門節²⁰⁾、正月に、生前に住んでいた家に戻ってくると信じられている。人びとは「おおきな部屋」の入り口ヤミから死者を迎え入れる。これより日常的にも非日常的にも入り口ヤミを境界にして、住まいの内部と外部とを分ける空間概念が存在していることがわかる。

5 住まいの空間構成に関わる象徴性 (図7)

ラフ・ナー族は東をムニト（ムニは太陽、トは昇るの意）、西をムニケ

図6 婚姻の儀礼における人びとの行動から見いだされる空間概念 (バーン・カの場合)

図7 住まいの空間構成に関わる象徴性 (バーン・カの場合)

(ケは沈むの意)と呼ぶ。人びとは太陽の出る沈む東西の方位を強く意識している。南北を表す言葉はもたない。

バーン・カのはとんどの住まいの棟の方向は、概括的に見れば東西に向いている。また出入り口やミは東側を向いている。したがって住まいの高床の上階オカロの「おおきな部屋」は東側に、奥まったオバテビは西側に位置することになる。

「おおきな部屋」と奥まったオバテビには、男のソダと女のソダと呼ばれる二本の棟持ち柱がある²¹⁾。二本のソダは住まいの西と東の端に位置して互いに対面している。男のソダは人びとの心的な中心となるオバテビを象徴する柱であり、人びとの霊への祈りの象徴となる柱である²²⁾。また女のソダは太陽がでる側に置かれている。これより太陽と女性とを重ねる感覚が読みとれる。

オバテビは人びとの心的な行動の中心となる場であり、「おおきな部屋」は人びとの日常の生活の中心となる場である。オバテビは心的な中心、「おおきな部屋」は生活の中心という抽象概念に対応している、と考えることはできる。

オバテビと「おおきな部屋」との間には、男のソダと女のソダに象徴される二元的に対立する概念が複合して存在している。オバテビには、奥一閉じた一聖という概念がかさなっている。また「おおきな部屋」には手前一開いた一俗という概念がかさなっている。住まいの西と東にある二本のソダは、男と女、聖と俗、隔離と開放などの対立する概念で意味づけられる「おおきな部屋」とオバテビを象徴していると考えられる。

このような東西の方向を女と男に結びつける象徴性の解釈はバーン・カでは有効である。しかしながら、その後調査したバーン・ビエでは、男のソダと女のソダは東西軸の上にはない。今後事例を重ねないと確かなことはいえないが、ラフ・ナー族の住まいの空間構成に関わる象徴性の説明は、男女を東西軸におく空間的秩序からする説明よりは、住まいの奥まった位置に男を手前の側に女を結びつける空間的秩序としてとらえるほうが的確なもの、と筆者らは考えている。

6 本章で得られた結果

本稿では、ラフ・ナー族の住まいをつくりだしている空間的秩序とその展開を、日常的・非日常的な人びとの行動のしかたおよび空間認識のしかたから追究しようとした。

事例的に調査したバーン・カの住まいと一部参照したバーン・ビ

エの住まいのしめす傾向をもとにして得られた結果は次のようである。

(i) 調査住居に継承され保たれてきた住まいは、三列の家シェカイエと五列の家ウガカイエである。近年には、同じ地域に居住する他民族の住まいの影響を受けていると考えられるオカイエ（あるいはティエ）と呼ばれる住まいも一部に現れるようになった。しかしオカイエの基本的な空間の構成は、シェカイエ、ウガカイエとほとんど変わらない。

(ii) 高床の上階の居住面オカロは、大自然の霊タブーを祀る社プーイエのある山の側を上位の側オナバ、山とは反対の側を下位の側オホバとする二元的に対立する場に分けて認識されており、居住面には上位下位の空間概念が存在している。上位の側と下位の側を分ける空間概念は、奥まった部屋オバテビにも存在する。

いっぽう「おおきな部屋」の奥まった場オホバ側は奥オコオ、入口に近い手前の場ヤミコ側は手前オバアと呼ばれる。住まいは「おおきな部屋」、内部空間、居住面としてのオカロの全体にある奥と手前の概念で入れ子構造のようにとらえられている。「おおきな部屋」には、上位の側オナバと下位の側オホバとに分ける空間概念と、手前オバアと奥オコオとに分ける二つの二元的に対立する空間概念が重層して存在する。これらの空間概念は日常生活および非日常生活における人びとの行動のしかたから実証できる。

(iii) 集落には大自然の霊タブーを祀るプーイエに関係する方位が存在する。プーイエのある山の側は上位の側カウ、集落をはさんだ反対側は下位の側カミと認識されている。また集落は、中心にある広場カコジをランドマークにして、プーイエ側は上位の側カコジナ、反対側は下位の側カコジホと呼ばれ、二元的に分けて認識されている。

住まいでは囲炉裏カツが中心となり、集落では広場カコジが中心となる、中心と周縁とに分かれる空間概念が存在している。また住まい、屋敷地、集落の段階ごとに、内部と外部とを分ける空間概念が存在する。

住まいと集落には、相似する空間概念が存在している。

(iv) 高床の上階の桁より上の小屋裏はオナ、居住階はオカロ、地上階はオホと呼ばれ、人びとは住まいの全体を三つの部分に分けるように認識している。また高床の床面を境界にして、住まいを「浄」なる場と「不浄」なる場に分ける空間概念が存在する。さらに小屋裏オナを聖チジャーなる場とし、オカロとオホを俗マチーな

る場とする空間概念が存在する。

(v) 日常生活における食事、炊事調理、外来者を応対する行動のしかたからは、男女・老若で行動の場を分ける上位・下位、奥・手前という二元的に対立する空間概念の存在を実証できる。

いっぽう外来者を応対する行動からは、奥まった部屋オパテビと「おおきな部屋」との間に隔離と開放の空間概念が見いだされる。またこの二つの部屋の間には聖チジャーなる場と俗マチーなる場という空間概念が重なっている。このような空間概念は、非日常生活における人びとの行動のしかたに顕在化して現れる。

(vi) 住まいの東西に対置して置かれる二本のソダは、「おおきな部屋」とオパテビを象徴している。「おおきな部屋」には手前、開放、俗なる場、オパテビには、奥、隔離、聖なる場という空間概念が重なっている。「おおきな部屋」と奥まった部屋オパテビには、女のソダと男のソダとに象徴される二元的に対立する空間概念が複合して存在している、と考えることができる。

ラフ・ナー族の住まいおよび集落をつくりだしている空間的秩序には、大自然の霊タブーを祀る社プーイエの存在が強く関わっているものと考えられる。また住まいは、奥まった場に男を、手前の場に女を対応させる枠組みで構成されている。この枠組みは、先行する研究²³⁾を参照すると、東南アジア大陸部の住まいと共通していることがわかる。さらに人びとの空間認識や行動のしかたからは、住まいと集落との間に、相似する上位と下位、内部と外部、中心と周縁などの二元的に対立する空間概念の存在を確かめることができる。ラフ・ナー族のようなアニミズムが支配する住まいと集落における空間概念は、平面的な相似性をもつのではないかと筆者は推測している。本稿でみいだしたラフ・ナー族の住まいと集落をつくりだしていると見られる空間的秩序は、あくまでも事例的なものではない。事例調査を重ねておこない空間構成原理を追究したい。

注記および引用文献

- 1) ラフ族は、漢・チベット語系チベット・ビルマ語族イ語支に属している。ラフ・ナー族、ラフ・シー族、ラフ・プー族などの支系がある。主として中国雲南省の瀾滄江の東西に位置する思茅地区、臨滄地区に住む。本研究で対象にするのは、ラフ・ナー（黒ラフ）と自称するラフ族である。
- 2) これまでにおこなった高床系の住まいに居住する少数民族のフィールドワークは、ダイ・ルー族（1993年から2000年）、ハニ族（1995年、1996年）、ダイ・リャム族（2000年、2001年）、ワ族（2000年、2001年）、ラフ・ナー族（2001年、2002年）などである。
- 3) 住まいの平面的な構成、住生活財・生活装置、日常生活および非日常生活における行動のしかた、住まいの各部の呼び名、空間の認識のしかたをあらわす語彙、などを実測、観察、聞き取りにより調査。調査は、塩谷壽翁、谷内麻里子ほか（以上、大阪工業大学）、松尾有平、佐藤梨紗ほか（以上、長崎総合科学大学）が共同しておこなっている。
- 4) 調査の内容・方法はバーン・カ調査に同じ。調査は、塩谷壽翁、谷内麻里子ほか（以上、大阪工業大学）が共同しておこなっている。
- 5) 本稿では、行動をあらわす要素のうち、身体動作および行為の場をしつらえる住生活財にはふれていない。行為と行為の場との関係に現われる空間概念を読み取ることに焦点をあわせたためである。
- 6) 日常的な行動（就寝、休息およびくつろぎ、外来者の応対、炊事調理など）がおこなわれる高床の上階の床面。
- 7) 谷内麻里子・塩谷壽翁：ダイ・ルー族の住まいにおける空間認識と行動から見いだされる空間概念 シップソーンパンナー（西双版纳）のバーン・ロン（曼龍）の場合、日本建築学会計画系論文集 第568号、9-16、2003.6
- 8) 同居して生業・生計をとる生活集団。ラフ・ナー族は一家一婦制であり、多くの家族では三世代あるいは二世代が同居する。住まいにおける基本的な行動は、家族の構成によって違ってはいない。また世襲の司祭、選挙で選ばれる村長などは存在するが、集落での階層差はほとんど存在しない。
- 9) ラフ・ナー族の信仰宗教は自然崇拝と祖先崇拝であり、精霊に対する

信仰は人びとの暮らしと強く関わっている（覃光弘等編著：中国少数民族の信仰と習俗下巻、第一書房、437-445、1993.3 による）。

10) 二元論的分類の方法は、日本と周辺地域の住居の空間構成の象徴的な二分観の観察にもとづく考察（Richard Zgusta: Dwelling Space in Eastern Asia—東南アジアにおける住居空間、大阪外国語大学学術研究双書4、1991.3）と方向を同じくするものである。

11) 畑聰一：離島集落における住居及び住居集合の共同性に関する研究、1996

12) 青木保・黒田悦子編：儀礼—文化と形式的行動、(財)東京大学出版会、1988.4

13) 注9)の引用文献および嚴御嫻（主編）江守五夫（監訳）：中国少数民族民族の婚姻と家族（下巻）、第一書房（発行）、189-206、1996.12

14) 一部は、前出注7)の引用文献のほか、谷内麻里子・塩谷壽翁・富樫類：ダイ・リャム族の住まいにおける空間認識と行動から見いだされる空間的秩序 中国雲南省思茅地区孟連ダイ族ラフ族ワ族自治県孟馬鎮マンボン（芒蚌）の場合、日本建築学会計画系論文集 第569号、23-30、2003.7、谷内麻里子・塩谷壽翁：「もの」の置かれ方と身体動作のしかたに現われる空間概念 中国雲南省シップソーンパンナー（西双版纳）のバーン・チャ（曼乍）の場合 ダイ・ルー族の住生活の伝統と変容、日本建築学会計画系論文集 第570号、79-86、2003.7、谷内麻里子・塩谷壽翁：ダイ・ルー族の儀礼における人びとの行動から見いだされる住まいの空間的秩序 中国雲南省シップソーンパンナー（西双版纳）のバーン・ロン（曼龍）とバーン・チャ（曼乍）の場合、日本建築学会計画系論文集 第574号、1-8、2003.8 などとして公表している。

15) バーン・カで住まいを建てることについて詳しいとされるムラ人、チャ・クーおよびチャ・ロウからの聞きとりによる。

16) オカロの中央に位置するカツ（囲炉裏）の置かれる部屋には呼び名がない。「おおきな部屋」は筆者が説明を容易にするためにつけたものである。一部の住まいでは、「おおきな部屋」をチョパテビ（こっちの部屋の意）、奥まった部屋をオパテビ（あっちの部屋）と呼ぶ。またふたつの部屋の呼び名が行為者の位置に関係した相対的な位置関係をあらわす住まいも存在する。この場合、行為者がいる部屋はチョパテビ（こっちの部屋の意）、その部屋からみてもう一方の部屋はオパテビ（あっちの部屋）と呼ばれる。本稿では、煩雑を避けるために、カツ（囲炉裏）の置かれる部屋を「おおきな部屋」、奥まった部屋をオパテビと呼ぶ。

17) バーン・カの住まいのほとんど（バーン・カ対象住居60戸のうち48戸、80.0%）は五列の家ウガカイエであり、三列の家シェカイエは3戸（5.0%）にとどまる。またオカイエは少数である（8戸、13.3%）。バーン・ビエでは、シェカイエとウガカイエはバーン・ビエ対象住居47戸のうち21戸と約半数（44.7%）をしめるが、バーン・カに比べるとオカイエは17戸（36.2%）と多い。またバーン・ビエには、バーン・カには存在しなかったミチャイエと呼ばれる平屋で地床の住まいが9戸（19.2%）ある。

オカイエにはシェカイエおよびウガカイエとは不連続な形態が見受けられる。それは屋根の形態、階段の形態と取り付きかたなどである。オカイエはその形態から判断すると、ダイ族の住まいとの融合が進んだ住まいと考えることができる。バーン・ビエ調査における複数の聞きとりによると、オカイエはダイ族の住まいの形態を模倣したものである。

シェカイエおよびウガカイエの柱は、掘って柱（イェクトトウウエ、イェクトは柱、トウウエは埋めるの意）である。ティエではアプス（礎石）に柱をたてる。シェカイエとウガカイエは、柱のほかはビー（床）もオパ（壁）もワ（竹）の住まい；ワイエである。柱も約30年前は竹だったという。また屋根は草葺きであり、草の家と呼ばれる。オカイエはブイエ（瓦葺きの家、ブは瓦の意）とも呼ばれる。

18) 非日常生活のおこなわれかたは、バーン・カの村長：チャ・ハイ、パーチャ（司祭）：チャ・ク、婦人会会長：ナ・ウ、ムラの産婆役：ナ・インより聞き取った結果を総合化したものである。

19) 非正常死は、自殺や生後12日足らずの子の死の場合である。

20) 小乗仏教の信仰に関する行事。ダイ族などの仏教信仰の影響を受けているものと考えられる。関門節はタイ語では、ハウヴァッサ（Hao Vassa）開門節はオウヴァッサ（Ouk Vassa）といい、漢語では、関門節、開門節と訳されている。

21) ソダは夫婦を意味する言葉である。また住まいの最も高いところにある柱を意味している。山から切り出される一本の木は切り分けられて、東側は女のソダに西側は男のソダになる。

22) 住まいが完成して三日目におこなわれる儀式イカヤでは、霊への信仰に結びつく男のソダの象徴性を確かめることができる。司祭パーチャは奥まった部屋オパテビで、ワビー（贅の子）の間からアポコと呼ばれる瓢箪の水を、男のソダ（棟持ち柱）にかける。パーチャは男のソダの方を向いて祈る。この儀式をおこなわないと悪夢を見たり災いが起こると人びとは信じている。

オパテビの男のソダ（棟持ち柱）にかかる側梁には、蠟燭ベホーがいくつも貼りつけられている。家族に病気などの災いがあつた時にパーチャはベホーをつくり人びとは貼りつけて祈る。オパテビは人びとが霊に祈る場である。

23) 注10)の引用文献に同じ。

(2004年4月8日原稿受理、2004年8月12日採用決定)